

## 事前ヒアリング・アンケート結果まとめ

本ヒアリングは、地域連絡会議構成団体等に、検証委員会で扱うべき検証課題や、今後のネズミ対策の進め方について、予めお聞きするものである。したがって、本ヒアリングは地域の意見の全てを吸収する性質のものではなく、検証委員会の進め方の参考とするための予備調査的な位置づけとして実施したものである。

ヒアリング実施日：平成27年3月5日～3月10日（詳細は別添）

ヒアリング相手：

NPO小笠原自然文化研究所、JA東京島しょ父島支店、小笠原村観光協会、一般社団法人小笠原ホエールウォッチング協会、小笠原村商工会、飼い主の会（※任意団体であり、一部会員に意見をいただいたもの。）、NPO小笠原野生生物研究会、（社）小笠原環境計画研究所、小笠原母島漁業協同組合、JA東京島しょ母島支店、小笠原島漁業協同組合、NPO小笠原クラブ

5	木		日本環境衛生センター担当者 父島着
		14:30-16:30	ヒアリング 小笠原自然文化研究所
6	金	9:00-10:00	ヒアリング 父島農協
		17:10-18:40	ヒアリング 観光協会 (Bシップ)
7	土	7:00-15:00	兄島現地調査・土壌サンプル採取
		16:00-17:00	ヒアリング OWA (OWA 事務所)
		17:00-22:00	ヒアリング 商工会 (保護官事務所)
8	日		母島移動
9	月	8:45- 9:15	ヒアリング 飼い主の会会員 (個人宅)
		14:00-15:00	ヒアリング 小笠原野生生物研究会 (保護官事務所)
		13:20-14:00	ヒアリング 小笠原環境計画研究所
		16:00-16:30	ヒアリング 母島漁協 (母島漁協事務所)
10	火	10:00-10:30	ヒアリング 母島農協 (船客待合所)
		10:45-11:15	ヒアリング 母島観光協会 ( " )
			父島移動
		16:30-	ヒアリング 父島漁協 (漁協事務所)
		16:30-17:30	ヒアリング 小笠原クラブ (KAIZIN)
11	水	11:30	環境省・検証委員会委員長 父島着
		19:00-21:15	ネズミ検証委員会住民説明会
12	木	7:00-17:00	父島島内案内 (兄島現地調査予備日)
		17:00-19:00	ネズミ対策検証委員会
13	金	終日	環境省・検証委員会委員長 兄島現地調査
14	土		父島発

## 1. 検証項目について

## ①事業内容の決定過程について

## ●事業の進め方について

- ・主語はネズミではなく、守るべき対象の「陸産貝類保護」にすべきで、そうすると保護のためのロードマップ、リカバリーマップが描かれる。
- ・事前事後の評価がないことが問題。生物相手にはトライアンドエラーであるはずが、目的が「ネズミの根絶」であったために、一発成功できなかったことを「失敗」としてしまった。根絶で成功・失敗を判断するのではなく、散布何日後に死ぬかなどの評価が必要。失敗原因も、地形が複雑、量が少なかった、均等に撒けなかった等の仮説でしかなかった。
- ・今回の問題は、公共事業の組み立て・進め方による不信感といえる。
- ・事業者が予算の制約や、単年度で成果を上げなければならないので、効率しか考えていなかった。検証の場へ事業者を引き出し、隠している膿は全部出した方がさっぱりする。
- ・事業者は「また失敗すると思われるが実施する」といったプレゼンをした。改善点が示されていないにも関わらず、「何が何でも実施する」という姿勢であった。
- ・事業者は地域の声を吸い上げていない。事業に対して都合の悪い発言をすると雇用されなくなる、との声があるし、地元や協力者たちも様々な思い入れがあるにもかかわらず、改善などを申し入れても無視されたと感じている。本当は、地元を仲間として取り込まなければならないのに、距離を置こうとしている点で問題がある。地元をどう巻き込んでいくかを常に考えて事業を進めなければならない。環境省と事業者の癒着まで疑う声がある。
- ・環境省と事業者による住民説明会は、住民の意見をスルーし、決まったことの説明でしかない。それが大反対を招いたり、(前回散布事業に関しては)住民が集まらなかったが、それが好都合で、事業が進んだりした。
- ・環境省は責任感が足りない。ネズミ対策は1回殺鼠剤をまけば済むのではなく、次の世代にまでかかるものであるのに、担当者がいるときだけ成果を上げればいいのか。
- ・以前に国はカブトガニとアサリ(コンペイトウ)の実態を把握しないまま埋立をして絶滅させた。同じことが起きる危機感を持っている。

## ●事業の実施方法について

- ・ベイトステーションから空中散布に転換する際、参考にした海外事例が少なかったと思われる。米国では、環境影響評価を綿密に行ってリスクと効果を図った上で実施している。NZの事例は海辺を含めて撒くようにという助言であったが、米国では、住民の不安に應えるため、海岸付近には空中散布せず、手撒きとベイトを用いた。どの事例をベースにしたかで、判断が違ったと思う。
- ・海外で成功したからと言って成功するとは限らない。散布現場を見ていて、地形にマッチしたやり方とは思えなかった。地形・自然特性を踏まえた事業方法の決定が必要。
- ・ネズミ駆除に限らず、手法選択のターニングポイントが有り、この10年間で、小笠原での緊急性と海外の実績から、流れ込むように進んできた。
- ・内陸に殺鼠剤をまけばネズミは食べに行くのに、なぜ海岸にも散布したのか。

### ●検討会の在り方について

- ・ネズミ駆除の専門家がいなかったことが問題。ネズミ駆除の専門性がなかったため、他地域でどうであったか、一般的手法がどうかの情報提供もなく、技術・方法が提示されて意見ができなかった。検討会が機能していたかも検証対象となるのでは。
- ・薬剤の専門家から選択肢が提示されず、誰も意見を言えないまま進んできたことが問題。
- ・検討会での議論に、一部意見の相違が見られたように記憶しているが、どのようにまとまったのか経緯が不明。殺鼠剤の毒性に関しては共通認識が必要なはずである。
- ・専門家は現場に入ることなく、データのみで議論している。住民もかかわるべきである。

### ●今回の事業の中止について

- ・農家ではこれまで殺鼠剤を使用して何もクレームが出てなかったが、環境省の説明は大きな誤解を生んだ。一般人にも殺鼠剤を販売していたが、問題が大きくなったことで、小さい子どものいる家には殺鼠剤を戸外で使用する際、戸を閉めるようにと言うようになった。
- ・事業を中止したことについて、英断だったと思う。殺鼠剤の空中散布は、他の生物に影響があるのではないかと、やっぱり心配していた。
- ・(全ての経緯は知らないが) 個人的には、合意形成の際に不備があったとしても、事業を中止する程であるのかと思った。

### ●資料の誤りについて

- ・再発防止が重要であるため、原因究明が不可欠だと思う。
- ・工場は新しい薬を使う時は、労働安全性、環境影響など、あらゆる部署が項目だし、評価をする、自己アセスメントの体制がある。面倒くさいが責任の所在ははっきりする。それでも、事故は起こりうるが、その際はアセスを元に原因究明を行う。

## ②地域との合意形成

### ●目的（＝マイマイを守ること）の理解について

- ・検証以前に、明確にすべき、なぜ駆除するのか、何を守るべきかが住民に伝わっていない。
- ・マイマイを見たことない住民が多い。住民はネズミ対策がマイマイのためとは思っていないし、マイマイで世界遺産に登録されたことも知らない人が多い。
- ・兄島視察会で被害を見たり、「マイマイのイマ」の講演会への参加でやっと問題を実感してもらえた。
- ・世界遺産に登録されるにあたり、マイマイが重要な要素であったことは認識している。
- ・兄島の現場で植物に携わっているので、ネズミ対策をやらなければいけないのは分かる。
- ・やはりまだ「一部の人たちの中で話し合われている問題」ととらえている人のほうが多い。もっと住民全体を巻き込む方法はないのか、限られた少数の人しか参加しない住民説明会のあり方を考えるべき。

### ●方法、安全性など、地域住民に十分に伝わっていたか。

- ・分かりやすさが必要（例：専門の業者にイラスト等委託するなど、もっとわかりやすい絵・文章でのチラシ配付、「小笠原諸島のネズミ対策」や「外来ネズミ対策」などの名称を誰にでもわかるように「カタツムリを守るためのネズミ対策」などのような名称にする。）

- ・ダイファシノンは、農取法、薬事法に則ったものであるが、散布量・方法が規定に合っていないといえないことが住民の不安にこたえられない要因。
- ・農家はなぜそんな毒薬（ヤソチオン）を使ったのか、と思っている。
- ・役所等からの様々な情報が細かい部分で変わっていくことに対し、住民はついていけない。どのような形で情報提供を行えばよいのか、検討が必要。
- ・母島の住民は、殺鼠剤の空中散布が行われていること自体を知らない人が大半だろう。

#### ●毒性についての説明

- ・製剤のMSDSなど、基本的な情報をきちんと示すべき。毒性などの不安に対して解決ができる部分もある。また、住民は、殺鼠剤の原体名および製品名があいまいな中、議論されると混乱するため、必ず製品別に議論を進めるべきである。
- ・死ぬ死なない（致死量）だけではなく、どのような影響を与えるかを説明すべき。
- ・農家から、自分たちがそれほど強い毒性の薬剤を使っているのか、といった声上がる可能性がある。そうならないよう誤解が生じないような資料、説明をしてもらいたい。用法・用量通りに使用するのであれば問題はない、といった情報提供をお願いしたい。
- ・第1回の説明会で、漁業者の「魚には影響がないのか」の質問に対して、水に入ったら毒性はなくなると説明していた。詳細・具体的な説明はなかったが、知識のない住民は、専門家に毒性はないといわれたらそこでそれ以上の質問ができなくなる。今回のことが明るみに出たのであれば、然るべき公的機関できっちり検証してほしい。本来、毒性の質問に対しては、最初から明確な根拠が示されるべきであり「そうだと思う」では納得いかない。
- ・砂浜に打ち上げられたスローパックについて、安全と説明したが、これだけ摂取したら危ないという説明にすべきだったのでは。

#### ●住民参加について

- ・島民の関心が少ない。役所だけで進めている感がある。
- ・「マイマイのイマ」で、兄島のカタツムリ保護の緊急性は理解した。自分に何ができるかを考えながら帰った。こういった悩む人を増やすことが「力」になる。こういった住民の気持ちの受け皿が必要であるのに、事業者は、毎日山に登れる人でないと受け入れなかった。
- ・アフリカマイマイの駆除や島内清掃のイベントには多くの住民が集まった。啓発目的でイベントを行うのなら、いかに人を引き付ける企画・内容とするかがポイントとなる。希少生物保護に駆除を組み合わせるのもよいのではないかと。座学では住民は集まらない可能性がある。
- ・説明会ではなく、小笠原の自然を守るための意見交換会にするべきである。始めは、意見など頻繁に出ないかもしれないが、会を重ねて作りあげたらよいのではないかと。

#### ●地域との合意形成のためはどうあるべきか。

- ・自然遺産への登録は、制約を受けるだけで、メリットがない。一部が関与するのであれば、それに対する協力は難しいと判断されても仕方がないのではないかと。
- ・よく聞く開発のための環境破壊や汚染などとは違い、本事業について島民と行政の願いに大きな食い違いはないはず。丁寧な手順を踏めば島民の協力や合意を得られるはず。
- ・関心を持ってもらわないと、勝手なことをやっているとの印象を与える。自分達の問題であるという認識を持ってもらうことが必要。関心を持ってもらわなければ先には進まない。

- ・全員が賛成することは難しい。その意味で、環境省としてやりたい方向性、強い意志は出しておいた方が住民は分かりやすい。また、科学委員会も、行政も、島民も納得すれば、強い毒を使うことも可能ではないか。

### ③環境影響について

#### ●過去の事業による環境影響について

- ・平成 21 年度の環境影響評価は今更可能なのか。どのようにやるのか。
- ・殺鼠剤の残留状況について実験が必要。
- ・魚への影響、ヤドカリが薬剤にたかって死んだという噂もあるためその検証も必要。オカヤドカリは、天然記念物であり、法的な観点も必要。
- ・海に流入した場合の魚介類への影響や人への影響を正しく検証する必要がある。「・・・と思われる」ではなく、きちんとした根拠を示してほしい。
- ・ノスリが減った実感や、殺鼠剤で弱ったネズミを食べてノスリが減ったという人もいる。
- ・平成21年に、ヘリが二見湾で薬剤を誤って落としたこと、それをどうフォローしたか。海洋分散したことのミティゲーション（緩和策）をとったか。前回、散布予定時期が冬で、海が荒れる時期のため、海に流出した殺鼠剤の回収ができるのか、との不安もあった。
- ・兄島には犬や猫はいないと思うが、（流れ着いた父島で）犬は食べないのか。
- ・自分で製品安全データシート（MSDS）を取り寄せて調べたが、大変な毒物である。安全というのならコップに入れて飲めるか？住民は兄島にタコを取りに行くし、魚が錠剤のまま呑み込んでいたときに、それを人が食べたらどうなるのか。
- ・ウミガメはレジ袋を飲み込むし、殺鼠剤のスローパックも飲み込む可能性があるのでは。
- ・殺鼠剤散布時期は、本当に冬がベストなのか。ザトウクジラの繁殖期が気になり。空中散布に限らず、他の手段についても効果的な実施時期について、また自然への影響の少ない時期について、丁寧に検証していただきたい。

### ④モニタリングについて

#### ●モニタリングを基にした事業の組み立て

- ・環境影響の検証も、ネズミ対策自体も、適切かどうかの判断材料がないことには先に進めない。「修正するべきは何か」もモニタリングから客観的に検証できるようにしてほしい。

#### ●ネズミの実態把握について

- ・ネズミ個体数など、実態を把握した上で対策すべきであるが、ネズミの特性もわかっていない。（自分は、畑でネズミの被害にあっており、クマリンでこれまで多数のネズミを撃退している。かごにクマネズミを入れてクマリンをあげて、耐性をもつスーパーラットがでていくことも知っている。そのため、クマリンを散布し3カ月明けてから別の集団になったときにまたクマリンを散布するという方法で対策してきている）

#### ●事業後のモニタリングについて

- ・散布した翌日に、餌がどれくらい残っているかを確認する必要がある。
- ・ネズミでどれくらいの被害が出たか絶滅した種がいるのか把握しているか。

## ⑤ 検証のあり方

- ・ 検証は、科学的にどうかということよりも、人がどう感じるかである。
- ・ 会議での意見・アンケートによる意見がまた反映されないようでは問題。
- ・ 化学的に毒を撒くのが楽だが、間違いを犯したし、住民は不信感を持ってしまったので、これからは時間がかかる。問題点を早くつぶしていけば、信用が上がり、次のステップに行けるはずである。検証しながらできるところからやっていくべきである。
- ・ 事業を中止したことによりネズミが増え、在来種への影響が今後増加することを懸念している。そのため、ヤソジオンの環境影響評価を優先的に進め、合意が得られた際には、殺鼠剤による空中散布または、代替方法による駆除を早急に望み得る。
- ・ 住民は、①ネズミはいない方がいい、②毒は使わない方がいい、という考えであり、ここにどうつなげるかという検証の仕方が必要になる。
- ・ 前向きにやってもらいたいが、きちんと検証した上で実施してほしい。
- ・ 事業開始当初、森林総研が殺鼠剤の安全性等について説明し、その段階では大きな問題はなかったにもかかわらず、問題が顕在化した経緯の検証が必要。

## 2. 今後のネズミ対策について

## ● 殺鼠剤の使用について

- ・ かが穴で駆除は無理。正しく使えばいいことで、兄島に散布しなくてはならない。
- ・ ネズミ対策の危機感を持っているし環境省が兄島の陸産貝類を守りたいのも分かるが、ヤソジオンを散布することは絶対反対。周囲から不安の声が届いており、環境省に対する不信感を持っている。ベイトステーションの使用も反対。毒性などの前提を納得できるまでは、まずは物理的な方法（かご）で対策すべき。
- ・ その場合も、踏み荒らし等による他生物への影響調査が必要。
- ・ 住民の思い込みをどのように打破していくかを考える必要がある。
- ・ 母島では農地で父島と異なりヤソジオンを使用している。価格は高いがクマリンに比べて効果が高いという認識である。

## ● 有人島も含めた全体的な対策

- ・ これまでも住民は、有人島の対策を求めているが、やらないのか。東京都や村と協力して分担して、住民参加で、リーダーシップを環境省が取って進めていけばいい。
- ・ リーダーシップをとって、目標を立ててロードマップ（例えば 10 年）を作り、徹底してやること。そうでないなら無駄でありやる必要はない。これまでも陸産貝類とネズミは共存しているはず。根絶を目標にすべきだが、コントロールでもいい。
- ・ 兄島の対策で、父島から泳いでくる「再侵入」の可能性がでてきたことから、前提条件が変わってきた。そこで、父島の駆除をなぜやらないかということも問題である。
- ・ 根絶ありきのやり方はどうかと思う。カゴワナでネズミの駆除が可能であれば、それにこしたことはないし、例えば全域ではなくとも、マイマイのサンクチュアリーを作る発想はあり得ないのか。

**●住民参加の対策**

- ・皆、ネズミを駆除したいので、住民参加でムード作りが大事である。有人島の対策をやるなら住民は参加するが、無人島では関心がない。住民は何をすればいいのか？関心が高まっているところであり協力する。人によっては、熱くなってしまうためクールダウンさせることが必要。
- ・兄島に行って環境省の取組を見ることはとても良い。自分も行きたい。農家の人にも言ってもらって多くの知恵を出してもらいたい。
- ・カゴわなだけでは捕りきれないのではないかと。どういう方法があるのか、みんなで考えるべき。環境省だけで考えるのではなく、地域で考えていくべきだ。これまで、そういったみんなで考える場はなかった。
- ・兄島をどうしたいか、そのために父島をどうするかというワークショップをしてはどうか。
- ・もっと住民参加に繋がる環境教育を取り入れるべき。

**3. その他****●ネズミの増加について**

- ・この 3~4 年台風が来ていないので、ネズミの巣が流されずにネズミが減っていないのかもしれない。
- ・最近、ネズミが増えている。三日月山周辺のネコが捕獲されてから、学校の校舎内でネズミがすごく増えて、ノリなどを食べて困っていると聞いた。
- ・ネズミが増えたのは、やっぱりネコが減ったからだろうか。ネコはハトを襲うので、野外にいるのはよくないと思うし、家の裏（前浜）では、ウグイスが鳴くようになるなど、いいこともある。いいことも、悪いこともあり、難しい。

**●その他の保全事業全般について**

- ・小笠原では、ミカンゴミバエで根絶できた事例がある。ネズミ用の避妊薬はないのか、そういうものを探すことに環境省は努力したらどうか。
- ・自然遺産の保全、自然再生全てにかかわってくる問題であるが、今回のネズミ問題がクローズアップされた感がある。
- ・ヤギを駆除して外来植物が増加してしまったように、特定の生物を駆除することによる生態系への影響が考慮されていない点にも問題がある。陸産貝類の保護でネズミ駆除だけを進めているのか？アンバランスではないのか。
- ・イエシロアリの侵入・分布拡大問題を隠そうとする自治体に対する不信感が強い。